



News **首席指揮者としての面目躍如
ガッティ、チューリヒ初の新制作**
先シーズンからチューリヒ歌劇場の首
席指揮者を務めるダニエレ・ガッティ

が、去る3月20日に当劇場で初めて、新プロダクションを披露した。観客にとっては、長い間待たされた末の「お手並み拝見」、プレッシャーもあったのだろう。最良の出来ではなかった公開GPの後、観客を退出させ、1時間も稽古を続けたという。プレミエでは、緊張感を保ちながら、新鮮な楽想を展開する新世代の《ファルスタッフ》を聴かせてくれた。「80歳のヴェルディが書いたこのオペラは、50歳の私に、毎回新しい発見をさせる」と語る彼らしい音楽だった。

マエストリの題名役は、軽めな歌唱が余裕を醸し出し、人物像をより現実的に表現することに成功していた。フリットリはアリーチェに最適なキャスティングで、フォード役のカヴァッレッティは、将来が楽しみなヴェルディ・バリトンだ。リーバウのナンネッタとカマレーナのフェントンは、背景のドタバタ喜劇を静止させ、弱音で愛を歌う二重唱で、視覚的対比と音楽的対比が相乗効果となり、夢のような瞬間を体現していた。マエストロの表現力もさることながら、その要求を実現できる恵まれたキャスティングだったと言えよう。

ガッティの契約期間は、ちょうど半分を過ぎたところである。今シーズンは、《パルジファル》のプレミエも控えており、「当歌劇場オケとは、ともに人間関係でも音楽面でも経験を積み重ねて来た。目標を定めるといふより、自然にどのような境地に到達できるか、見て頂きたい」と、手応えを感じ始めているようだ。

27日朝の、マーラーの「9番」による第4回交響曲コンサートは、数日前に、「日本の津波被害者に捧げる慈善コンサートにする」と発表され、大成功をおさめた。

Scramble Shot

同日夜にも《ファルスタッフ》の公演があったが、終演後、疲れを隠し「自分たちができる当たり前のことをしただけ」と、握手を交わした手の平から、日本の犠牲者への心が伝わってきた。(中 東生)

